

# 医療の哲学序説

豊 田 剛

通常、医学と医療は区別される。医学とは医についての理論（学問）であり、医療とはそれに基づく実践とされるからである。しかし一般的にとらえ方としては、この両者を区別せず、ほぼ同じ意味あいの語として受けとっていることが多いように見うけられる。もっとも、理論のない実践も、実践を伴わない理論も、いずれも相応の欠陥を免れないから、両者が密接に関連するものであるのはむしろ当然ともいえよう。従ってこの両者は相補的なものであると考えるしかない。その意味も含めて、ここでは一般的な視野に立って考えるという立場から、両者を敢て区別しない使い方をする。つまり「医療」を「医学」も含めた広い意味で使うことをあらかじめ断っておく。それによって大きな不都合が生じるとは考えられないからである。

まず最初にごく素朴な疑問をあげてみたい。それは、医療の進歩はめざましいといわれているのに、それならなぜ病人の数が減らないのだろうか、というものである。これは明らかにおかしい事態ではあるまいか。というのもこれまでわからなかったことで解明されたことも少なくない。また診断技術の向上は、MRIやPETなどをあげるまでもなく、疑いえない事実であると思われる。治療上の技術のめざましい進歩も指摘せねばならない。新しい薬が次々と開発されているということも更にそれに付け加わる。そういったいろいろな面での進歩がいわれるにもかかわらず、ではなぜ病人の数はむしろ増えているのだろうか。これはどうも理解しにくいことなのではないだろうか。

これは一見素人じみたつまらない疑問として一笑に付されかねないものかもしれない。しかし決してそうではない。それは低次元の間であるどころか、現代医療のかかえている最も根本的な問題点へと我々を導いていかないではない性質のものであると考えられる。

本題に入る前に少々寄り道をするをお許し願いたい。それは他でもない、わかりきったこと（ともいい切れない面もあるが）の確認である。つまり我々は病気というものをどう評価すればいいのか、ということである。もっと単刀直入に、病気になることは良いことか幸せなことか、と行ってしまってもよい。常識的に考えて、病気になりたい人などいないであろうし、病気になることが幸せであることなどありえない。従って一まず病気をマイナス要因、デメリットとしても異論はあるまい。ただ問題はそう単純ではない。人が病気になることは決して幸せなことではないにせよ、実際に病気を自分で経験することで、そこから得がたい貴重な教訓を学ぶことがあるからである。実際問題、一度病気になった人が健康を回復し、ずっと健康で全く病気知らずの人よりも、健康の有難さをより一層深く心にしみて感じるということは珍しいことではない。病気によってこれまで見ていた世界が一変するほど世界観が激変することすらある。桜の花が、南天の赤い実の色がこれまでと全く違って見えるという体験を語ってくれた人もいる。また病気を体験することで、健康な時には知ることのできなかった人生の別の局面を知るに至り、それによって人生に対する見方、感じ方、考え方が更に一段深まるという効用もある。更に自分が病気をしたことで、これまでそれほど切実に感じることのなかった病人の心理というものがわかるようになり、他人に対する思いやりやいたわりの気持が増すといった利点もある。それを人間的により成熟することとみることもできるだろう。それが証拠に、古代のヒポクラテスにせよ、近世のフーフェラントにせよ、医師は健康でなければならないとするのが通例であるにもかかわらず、現今では却って、患者の精神状態をもっとよく知るためには、医師も自分が一度病気になってみる必要があるといった逆説的主張すらみられるほどである。このように我々が病気から有益な教訓を多く学ぶことがあるにしても、それでも病気がいいものだというわけにはいかない。先の例にせよ治ったからいいようなものの、そのまま死んでしまう可能性だってあったのである。従って人間にとって心身ともに病むことは決していいことではないと断言しても差し支えないのではないか。そしてそこから、病人は少ないほどいいという結論を導くことは決して

難くない。病人の満ちあふれた社会よりも病人の少ない社会の方がいい社会であることは疑いえないからである。単純化すれば、病気になる人間が少ない社会ほどいい社会だといえるし、そういう社会こそ我々の目指すべき望ましい社会だということが許されるのではないか。その点からいっても、病人の増えている現在の社会がいい社会とは到底考えられず、年間自殺者が常に三万人を超える（その大半がうつ病と推測されている）ような社会がまともなものだとは考えにくい。それはいわば「病んだ社会」と形容してしかるべきものではあるまいか。

冒頭にあげた例の「素朴な疑問」は、こういう社会の現状をどう理解すればいいのか、そしてどうすればもっとましな社会が実現できるのか、という問題意識に根ざすものなのである。

医療が正しい歩みをしているとするなら、病人の数は減るはずだ、という前提が出発点であった。この前提自体が間違いだという見方もありうるが、それが立証されない限り、医療のあり方に問題があるということになる。

医師不足が喧伝される昨今、病人の数が増えているというのは事実であろう。ではなぜこういう事態が生じているのであろうか。病人の数が減らない理由としてどんなものがあげられるのであろうか。これまで知られていなかった新しい病気が次々と出現し患者が増加しているとするのはどうか。エイズのような感染症を例にとれば、たしかに東南アジアやアフリカでの爆発的蔓延という由々しい事態はあるものの、先進国ではそれほど急激な増加は起っていない。むしろ対策が講じられて、沈静化しているのが実情ではないか。これまで未知であった病気の発見がないわけではないが、こういう病気の種類が飛躍的に増加しているとは考えられない。むしろ増えているのは慢性病であり、その病人の数であろう。

病人の増加が事実とするなら、その内実を吟味してみる必要がある。そもそも医療はそれを実施する例とそれを受ける患者の側という二つの要素の総合からなる。従って考察も当然ながらこの二つの面から行うしかない。

まず患者の側からこの問題を考えてみよう。その際最も大事な要素としてあ

げられねばならないのは、患者の側の意識という問題である。病人の増加に関しては、その人の意識と関わる面が多いと思われる。それはどういうことか。その一つは不必要な医療である。ひと頃、開業医の待合室が老人のたまり場化していることが話題になり、たいした病気でもないのに、それどころか病気でもないのに医者に行く老人が医療費の無駄使いの見本として批判の俎上にのせられたことがある。この問題は老人が、老人には特に必要であるにもかかわらず、欠けがちな他人との交わりを求めたものとして、医療の問題に限定されない社会的視点を含むものであるが、それを一まず別にすれば、そこには健康という問題に対する考え方の未熟さがうかがえる。人間は自分の健康ということについて、自分なりのしっかりとした考え方を持つことが望ましいのはいうまでもない。ところが大多数の人はそれがまるでできていないように見える。自分の考えがないと何か他のものを頼ろうとする。つまり医療の側を全面的に信頼し、すべてをまかせてそれに依りかかることになったり、医療をすべて否定し、信心で病気を治そうとしたりする。医療の側も不必要なら突き放せばいいものを、しかしそんなことをすると儲けにならないので、受け入れる。風邪をひいて医者に行く人がその好例である。「家で暖かくして1~2日寝ていれば治る。薬など必要ない」というべきところを、抗生剤を処方する。抗生剤の乱用が、耐性菌の出現をあげるまでもなく、人間の健康にとってトータルに考えてマイナスであることは明らかであるのに。しかしこれは「風邪ぐらいでは薬を飲まない方がいい」という常識すら欠いている患者の側にも問題はあるが、どちらかというとならぬと薬を出す側の罪の方が重いのではあるまいか。このように患者側の無知につけこんで儲けようとするさもない魂胆が医療の側に見られるのは残念ながら事実である。(ここにすでに資本主義の論理にからめとられた医療のあわれな姿がかいま見えるが、それについては後述する。)医療の側にとって儲けにつながる患者の増加は歓迎ということになっているのだが、これは明らかに不必要な医療費の支出になるのではないだろうか。要するに患者がもう少し賢くなれば、無駄な薬は飲まなくてすむし、むしろその方が費用もかからないし健康にいいはずである。それが医療費の削減に資することうけあいであ

る。薬をプラス面からしか見ず、薬には必ず副作用があるという常識さえわきまえず、薬信仰にどっぷりつかって何の疑問ももたない人が多すぎるのである。この事態を打開することが大事な課題の一つである。ただ患者の増加というこの現象は患者側にのみ責任を帰してはならず、両者の合作である点を忘れてはならない。従ってこの現象は、原理的に考えて、どちらの側からの働きかけによっても（できれば双方からが望ましいが）改善できる余地があるといえる。（患者の側の意識改革の必要性はこういう面にとどまるものではない。モンスター・ペイシエントに代表されるような困った患者の存在も実はそこに帰着するのだが、ここではこれ以上立入らない。）

患者側の意識という問題点に関して更につけ加えるならば、こういうネガティブな面だけを指摘するのでは十分ではない。人間の体は極めて精巧精密に作られており、その美事さには舌をまかざるをえないほどだと思われる。従って身体の「自然」のメカニズムに逆らわず健全な生き方をしていれば、そうそう病気になることもないといえるはずである。にもかかわらず病気になる人があとを断たないのは、その点での配慮不足によるところが少なくないといえるのではないか。自分の体というものは、これまで生きてきた当人が誰よりもよく知っているわけだから、自分で健康とは何かということについてしっかり考え、それを実現できるように努力することは人間の当然の責務である。しかも WHO の健康の定義からもわかるように、健康とはただ病気ではないということでは十分なのではない。もっとポジティブなプラスアルファが付け加わる必要がある。そういう視点も含めて、あやしげな健康食品（健康食品がすべてそうだというわけではない。またそれを求めるという問題意識にも十分意味はある。）に容易にはまる人が少なくない現状からしても、健康というものについてももっとしっかりとした見解を持つことはあらゆる人にとって急務だといえるのではなからうか。

患者の側の意識改革が必要だというのは至極もっともな主張である。しかしそれがあまりはかばかしい進展をみせないことからしても、その問題が容易なものではないことがわかる。たとえば生活習慣病を例にとってみると、それが

文字通り生活習慣を改めることで改善可能なものであることはいうまでもない。すると要は患者側の努力さえあればいいということになるのだろうか。多くの人に指摘される運動不足、栄養や健康への影響を考えない暴飲暴食、喫煙、夜ふかし、睡眠不足、等々、これらは病気になる人の側の実践しだいでどうにでもなる問題であると一応はいえる。病気になる者が馬鹿だ、意志薄弱だと非難することはたやすいが、それで事態が変わるとは思えない。やみくもに「かくあるべし」というお題目をかかげて強調してみても、道德の問題と同様で、「馬の耳に念仏」になりがちであることは見えている。ではどうすればいいのか、それを考えてみるしかない。

ここで重要になるのは、人間が「社会的存在」であるというごくごく自明の事柄である。人間の健康を全く何の制約もないような状況で、つまりあらゆる客観的制約を捨象したかたちで考えてみても意味はない。どんな人間でも一定の具体的な社会状況の中で生きており、その影響を受けざるをえないからである。どんな社会に住んでいるかということによっても、人間の健康は大きな影響をうける。ストレスの多い環境にいれば病気になりやすいのは当たり前であろう。従ってその人の住んでいる環境が住みやすいあるいは暮らしやすいものかどうかでも大事な要素の一つになる。「自分の健康は自分で守るよう努力せねばならない」というのは全く正しい命題であるが、しようとしてもそれができない状況なら、まずその状況をなんとかするしかない。もっと運動すべきだとわかっているてもできないこともあるだろう。食事にもっと気を配るべきであるのに、そうする余裕がないこともあるだろう。もっと睡眠をとるべきなのに、それが叶わないこともあるだろう。このように客観的な制約を無視してはこの問題を論じることはいえない。そして残念ながら、人間の置かれている客観的状況は、個々の人間が自らの健康維持のための努力を払うのに必ずしも適したものではないことが多い。ではどのように、またどの程度までこの社会的制約を斟酌して考えればいいのか。これがまた実に難しい問題なのである。人間によってその制約の中味が相異なるからである。つまり主観的制約（その人の体質、遺伝、その他）においても、客観的制約（その人の仕事の内容、時間、場所、居

住環境 etc) においても各人はそれぞれ異っているからである。ではどうすればいいのであろうか。

各人が自覚して自ら健康維持の重要性にめざめ、そのための努力を自発的に行うのが一番望ましい。それはいうまでもないことだが、それを妨げる要因もいろいろあり、それがおいそれと可能ではないのが大方の実情である。そういう状況であるから各人に対して何か積極的な働きかけがなされる必要がある。医療の側がその役割の一端を担うべきであるのは当然だが、後述するような理由でそれが十分はたされないうらみがある。ではそれ以外にどのような可能性が考えられるだろうか。学校教育の場で早期から健康についての問題意識を深めるような働きかけがなされるのは大いに有効であろう。しかし実際問題それがどれほど効果をあげているかというとはなはだ心もとない。それ以外だと新聞、テレビといったマスメディアの影響力が考えられる。新聞やテレビの報道を信用する人がけっこういるが、これほどあてにならない情報もない。マスメディアが公正中立の報道をするなどということ信じられる方もお目出たい限りだが、その正体が資本に基づく企業に他ならないことを考えれば、それがどれほど愚かな態度かがわかるはずである。マスメディアがどれほど中立を標榜してみたところで、その活動が社会内部での企業活動の枠を超えるものでない限り、資本の論理にのっとった活動たらざるをえない。また読者視聴者にそっぽを向かれては事業自体が立ちゆかないので、一般大衆に迎合することも忘れてはならない大切な手段になる。これは公共放送の場合でも全く変わらない。マスメディアが大衆を洗脳するというだけでなく、逆に大衆がマスメディアの活動を制約するという面もあることが見落とされてはならない。マスメディアが大衆の意識を一定方向に導く強力なイデオロギーとして機能していることは一目瞭然であるし、大衆もそれにのせられ、それどころかむしろそれに積極的に荷担しているのが現実である。このようなマスメディアに健全な教育効果を期待できるかといえば、はなはだ懐疑的にならざるをえない。

しかしひるがえって考えれば、こういう事態がマスメディアと大衆の望ましいあり方でないことは確かである。本来マスメディアの流す情報は受け手をた

だ楽しませることがすべてであってはならない。エンターテインメントは大事なことからそれを否定するのではないが、それ以外に何らかの啓発作用を持つことが求められる。情報を受け取る側はただ楽しむという意味での、しばし現実の苛酷さを忘れるというリラックス効果以外にも、何らかの意味で自分が変わる、得るところがある、高められるという部分があってしかるべきではなかろうか。情報の受け手は何も考えずただそれを鵜呑みにするだけではいけない。それを何らかの形で正しく評価できるのでないといけないのではないか。そうでないと結局情報に翻弄され洗脳されてしまうことは避けられない。現状は遺憾ながら全くその通りの状態になってしまっている。受け手に何らかの識別力があれば（といってもそれは元々あるものではなく、生きていく過程で育ててきあがっていくものであるが）間違った情報にはすぐ気づくだろうし、受け手がしっかりしていさえすれば、情報を送る側もそういいかげんなことはできなくなるはずだ。このように情報の受け手送りが互に高めあうのが本来あるべき姿ではないか。ところが現状は明らかに正反対の方向を向いている。愚かな受け手は愚かなことを求め、送り手もそれに迎合してこたえる。お互に相手を愚かにしあう競争をしているかの感すらある。お互に高めあうべきところを、お互に愚かにしあい、共に愚者の樂園を形成し満足している。そしてこういう構図は何もマスメディアと大衆の間にだけ見られるものではない。この社会のあらゆる場面でよく見かけられる現象なのである。一番わかりやすい例をあげれば、政治家と国民の関係がそれである。ロクな政治家がないという嘆きは誠にもっともだが、それは国民の愚かさの正確な反映なのである。愚かな国民にはそれに似つかわしい政治家があらわれるのである。愚かな有権者が愚かな政治家を選挙で選ぶのだから、そういう意識に見合った政治家しか出てこなくても別に何の不思議もない。もうちょっと有権者が賢くたまわれれば、こんなことにはならないはずだが、これが紛れもなく現実の姿なのである。お互に自覚なしに愚昧なままでその状態をそのまま維持するように馴れ合って自足しているわけである。そしてそれに類似したことがこの社会のいたるところに見られるといっても過言ではない。しかもこれが一番大事な点なのだが、医療側と

患者側との関係にも全く同じ構図があてはまるのではないかという疑念を筆者は払拭できないのである。

これらのことは社会構造そのものがそういう方向性を持つような仕組みになってしまっていることに由来する部分が多い。単純な発想で考えるなら、社会を構成しているのは人間なのだから、それをよくするのも悪くするのも人間であるとなる。それなら社会は人間のやり方しだいでどうにでもなるはずで、社会が悪ければやり方が悪いということになる。民主主義がまともに機能しているなら、原理的には、いい社会がつかれるはずである。しかし現実はいかに程遠いといわねばならない。なぜなら個々人の意識だけではどうにもならないような大きな力が働いて全体が動いているように見えるからである。そこでは個人のバラバラな力ではいかんともしがたい壁のようなものが大きく立ちふさがっているような感がある。こういう状況では個人の力では現実はいかんともしがたいという無力感が生じる。個人がバラバラではどうしようもないので、個人の力の合一が必要なのだが、それができない。かつて力をふるった労働組合といった組織も形骸化しまともな活動をなしえない体たらくである。こんなに人間がバラバラに切り離されては何の力にもなりえない。昔から支配の哲学として知られていた「分割して統治せよ！」が見事に貫徹することになっている。こういう状況では、かつてのストア派のように、自己の内面に沈潜し自足の境地を求める人がふえても決して不思議ではない。バラバラに切り離された無力な個人は自己の内面に安息を求めることによって自足し、それによって却ってその軽蔑すべき現実を結果的に肯定し補完することになるという皮肉。その実例は歴史上どこにもいくらでも見いだせるが、それが正に今のまぎれもない現実であることを知ると嘆息を禁じえない。しかしそれでは矛盾にみちた現実を固定することになるだけで、何の進展も期待できないからこそ、その事態を何らかの形で打開するための手立てを考えねばならないのである。

そういったことすべての根源にあるのが、我々の生きているのが資本主義社会だという事実である。そこではすべてが資本の論理によって動いているといっても言い過ぎではない。この社会の中での活動はすべからず資本の論理に

従って動いていくしかないようにできているので、医療も当然その枠内で動いていくしかない。そのことを我々はまず押えておかねばならない。

最初の問に戻って考えてみよう。医療の進歩が喧伝されて久しいのに、なぜ病人の数が減らないのか、というあの素朴な問である。この問は医療というものがもともとかかえている、いわばパラドックスともいうべき性質に我々の目を向けさせる。それを簡略化した形に命題化すれば次のようになるだろう。医療が発展すればするほど病人は減る。すると医療の必要性は相対的に低下する。病人が少なくなれば医者がたくさんはいらなくなるのは自明だからである。つまり医者というのは自分の本来の目的（仕事）を十分にあるいは完全に遂行すればするほど、自分の必要性や存在価値を自分で減少させていく、いわば自己否定的な存在なのではないかということである。もっと露骨な表現を厭わなければ、医者は正しくふるまえばふるまうほど「自分で自分の首を締める」ことになるのではなかということである。こんな素人じみたことを言うこと自体、顰蹙を買う恐れがないではないが、これは決してつまらない屁理屈などではない。この問題を掘り下げていけば、現代の医療のかかえる問題の核心に触れることになると確信する。それがこの論稿の目指すところであるといってもよい。

もっとも病人増加の責任を医療にのみ帰するのは公平ではない。もちろん医療が関与する部分は小さくないが、それだけでこの現象を説明するには無理がある。先にも少し触れたように、それは人間がどんな環境（状況）で生活しているかに依るところ大だからである。早い話、どんなものを食べているか、どんなところに住んでいるか、どれくらいのストレスにさらされているか、これらの条件がすべて個人の健康のあり方に関与している。とりわけ食べものの影響は大きいだろう。有害といわれる添加物入りの食品、偏食、食べすぎによる肥満、硬いものを食べなくなったための咀嚼不足と顎骨の未発達による各所への悪影響等々。そこに見られるのは食べものに対する問題意識の欠如、無知、無関心である。しかしこれとてすべて自己責任とばかり、個人にのみ責めを負わせるわけにはいかない面がある。おいしそうなものをいっぱい並べ、上手に宣伝して売りこむというこの社会のあり方が、その誘惑に抗しきれない人間

を否応なくまきこんで、それで社会が繁栄しているという側面を否定するわけにはいかないからである。現代の人間は宣伝という企業形態を含む巨大なマインドコントロール装置の中に置かれているかのようである。また有害とわかっていても経済的な理由その他でそれを摂取せざるをえないこともあろう。いずれにせよ「自分の健康を守るのは自分しかない」という立場にたつなら、人間はもっとものごとをよく考え、他人の意見にふりまわされるのではなく、もっと賢くたちまわるのでなければならない。それができないことが病人増加の一つの要因をなしていることは明らかである。

以上で、病気になる者がもっと自分の健康についてきちんと考え正しい生き方を実行していくことで、病気を減らすことが可能であることは示された。ただこの場合もそういう人間の意識を高めるのに貢献してしかるべきものが、その働きをしない、それどころかむしろ邪魔をし障害となることがあげられる。先述した以外に、その一つとして医療を実施する側の意識があげられねばならない。

先にあげたいいわゆる「パラドックス」を思い起こしてほしい。医療の使命は病気を減らすことであって、決して増やすことではない。ところがその使命を忠実に果たせば、医療は自分の仕事が減るという事態を甘受せねばならなくなるということであった。だから逆にいうと、病人が増えているということは、医療が自らの使命を十分に果たしていない、あるいはその果たし方に問題があるということになるのではないか。こういう疑問が自然とうかび上がってくる。

先に我々が生きているのは資本主義社会なのだということを大事な点として強調した。医療も当然その制約を受けないでいることはできない。資本の論理が目指すのはあくまで利潤追求である。もっと平たくいえば商売である。医療も研究にせよ、治療実践にせよ、金がかかるような形でしか、或いは金が儲かるような形でしか営めないような構造になってしまっている。薬を使わなければ儲からないシステム、検査をしないと儲からないシステム等。(アメリカの例でいうと、技術点を高くすることで、薬を多量に使わなくてもやっつけけるシステムも可能である。) 結局診断も治療も金がかかるような形でしか行えな

いようになってしまうのである。

この点に疑問を持つのは、人間の健康維持は何も金をかけなくてもかなりの部分可能ではないかと考えるからである。驚くほど精妙に作られている人体には免疫力があるし、病気を治す自然治癒力も具っている。それをうまく利用すれば、病気にはなりにくいであろうし、病気になっても治りやすいのではないか。特に病気になってしまってから治療するよりも、そうならないようにする方がずっと効率がいいことはいまでもない。治療より予防が優先されるべきなのは当然ではないか。これなら医者の数も少なくすむ。

こういう考えを基本におくならば、現代の医療はなんとそれから遠く隔ってしまっていることかと慨嘆を禁じえない。しかしこうなる事情もわからないではない。医療が商売なら患者は顧客である。お得意様の数は多いにこしたことはない。すると医療が患者の増加を歓迎するのは当たり前ということになる。病人が減れば医療は「飯の食い上げ」になりかねないからである。従ってこういう体制では医療の側が患者の増加を望むようになるのは避けがたい。少なくとも病人が減らないようにと願うだろう。医療従事者がそれを意識しているかどうかは別である。恐らくあまり意識されていないのかもしれない。いずれにせよ医療がこういう形で動いていることは否定できないのではないか。

しかしこういう医療のあり方はどう考えてもおかしいのではないか。病気というのはくり返すまでもなくマイナスである。もっとも理想としては想像されても、このマイナスがゼロになることは考えられない。しかしマイナスが多いほど栄える仕事とは一体何なのであろうか。先述したように、病気になる人が少ない社会の方が病人で満ちみちている社会がより望ましいのは自明ではないか。この病気の部分を犯罪あるいは犯罪者とおきかえても、それはそのまま妥当する命題であろう。犯罪の少ない社会がより望ましい社会であることを否定する人はおるまい。犯罪が多いとそのために必要な警察や司法関係者の数も多くなる。アメリカ合州国のように刑務所を増設しても囚人を収容しきれないほど犯罪者の多い社会がいい社会であるはずがない。犯罪の数は少ないほどいいにきまっている。しかしこれを逆にしてみるとどうか。警察官や司法関係者

や刑務所の職員などが仕事をし食っていくためには犯罪者が必要だということになるが、これがおかしいのは明らかだろう。それと全く同じ構造が医療にもあてはまるのではあるまいか。つまり医療が存続していくためには病人が必要だということになっているのではあるまいか。もっと端的に言えば、医療が病を作り出している<sup>1)</sup>という面があるのではないか。現代の医療の大部分は対症療法でしかない。病気を根本的に治すのではなく、さしあたり症状を緩和するというでお茶をにごすことが多い。アトピーや花粉症といったアレルギー疾患しかり、肩こりや痛みに対する痛み止めしかり、全く歯のたたない自己免疫疾患しかり、高血圧に対する降圧剤しかり。これらを見ていると、人体に元々そなわっている自然治癒力によって治すのではなく、対症療法でひとまず症状をおさえるといった姑息な処置に終始していることに気づかされる。もっともこういうやり方をしていれば、決して根本的な治療には至らないから、いつまでも患者をお得意様として囲いこんでおけるというメリットがあることも事実である。それは商売としての医療に最も適した対応であるとはいえる。勿論それは人間の健康を全体的視点で考えた対応にはなっていない。どう考えてもこれではいけないのではないか。

そういった医療の悪影響も含めて、もっと気になることは、人間の体力、抵抗力が全般的に低下しているのではないかということである。医療がその一翼を担っているのは確かだが、それは人間が便利で楽な生活を求めることから必然的に結果することでもある。わかりやすい例でいえば夏の冷房である。夏は昔から暑いと決まっている。クーラーなどない時代は体を暑さに適応させることで人々は夏を乗り切ってきた。しかし冷房に頼りすぎるようになると、体は自らの持っていた発汗をはじめとする体温調節機能を働かせる必要がなくなる。これは明らかに体の退化をもたらす。これでは調子がおかしくなって当然ではあるまいか。また世の中が便利になって交通機関なども発達した結果、人間は歩くことが減った。それは運動量の減少であり、そこにも楽することのツケが回っている。更に現代は飽食の時代といわれるように、運動によるエネルギー消費は少なくなっているのに、食べすぎて肥満になる人があとをたたない。

ストレス発散が食うことと買物ぐらいしかないという情けない社会状況もそれにあずかって力があるのだろうか、肥満が健康にとってよくないことはわかりきっている。何度も飢餓の時代を経て生きのびてきた人類の遺伝子には、飢えに対抗するための仕組みはあっても、飽食などといった事態は予測すらできないから、何の対抗手段もそなわっていない。糖尿病がふえるはずである。これではまるで病気になるために生きているようなものではないか。人間は常に楽を求め、機械の発達が限りなくそれを推し進めてきたが、結果として人間の基本的な体力そのものが凋落の一途をたどることになってしまった。また異常ともいべき清潔志向が免疫力の低下をもたらし、病気に対する抵抗力も落ちている。これではいくらでも病人が増えるという状況は避けられまい。人間はまずそのことに気づき、自分でその事態を打開するよう努力するしかないといえよう。

しかしひるがえって考えれば、こういう状況は医療にとっては極めて好都合であることがわかる。医療がこういう事態を根本的に解決しようとしなのは、それが医療自身の保身のために最も有効なやり方だからである。しかしこんなやり方でいくらでも病人が増えるような事態を放置して、否それどころか積極的に病人をつくりだすようなことをしておいて、それでお金儲けができて、そんなことでいい筈がないではないか。こういう事態を何らかのかたちで打開する方途を案出せねばならない。

あらゆる人間が、社会全体がこの資本主義という完全に自浄能力を欠くことをその本質的特徴とする狂暴な装置にのみこまれ、いいように翻弄されているという現実を認めることから出発するしかない。医療も例外なく完全に資本の論理に組みこまれているのだから、医療従事者も患者もその制約から解き放たれることはできず、どちらの意識にもその影響が深く刻みこまれている。その中で医療が営利企業化することを避けることは困難である。問題は医療従事者の側の意識である。採算を度外視せよなどと非現実的なことはいわないが、その制約の中にあっても、営利が医療の目的になってしまっただろう。しかし現実には残念なことにそうなっている。当然医療従事者の意識も

それに引きずられている。薬など出さないのがベストの対処だとわかっている、そうするわけにもいかない。また医療側の意識だけでなく、患者側の意識にも問題がある。こういうシステムの中では双方の意識にバイアスがかかっていると見ざるをえないからである。医療側は事の成りゆき上そうなっているとしても、患者を増やして金儲けすることが中心目的になってしまっただけとはいけなまい。医療側は何が正しいのか適格に判断できるだけの見識を持たねばならない。少なくとも自分のやっていることの当否を自己吟味することが必要であることを自覚せねばならない。忙しすぎてものを考えるヒマもないほど働かされているのが実情なら、医療側は自分を顧みること（これが哲学の本義である）の重要性に思い至らねばならない。それができるなら、本当の意味で患者のためになることは何か、今やっている処置は果たしてその基準をみたしているか、を考えるであろうし、言葉の真の意味で、「健康とは何か」「病気とは何か」という最も根本的な問題を熟慮する必要性に目覚めることも期待できるのではない。ただ医療の側が時流に流され、医療の本質とは何かを真剣に考える暇を持たない状況にあるとはいえ、その状況を後押ししているのが患者の側であることも忘れてはならない。医療の側が自らの本来の責務について考えることの重要性を等閑視しがちであることは、患者の思慮不足がそれを助長しているということでもある。といってもささいなことでもすぐ裁判に訴え賠償金をせしめようとするアメリカ社会によくある患者のまねを勧めているわけではない。しかし医療側のいうことを何でも唯唯諾諾と受け入れる態度が、何でも「おまかせします」という姿勢が改善をはばんでいることを知らねばならない。くり返しになるが、患者の側ももっと賢くならねばならないのである。それができれば医療側も自己反省をせまられることになり、あまりいいかげんなことはできなくなるからである。そういう形で改善のための相乗作用が起ることが望まれる。

といっても現今のようにここまで底なしの泥沼にとっぷりつかったような状況では、おいそれと改善のきっかけはつかめないだろう。そういう場合は原点に戻るしかない。根本に立ちかえって考えるしかない。一種の開き直りのよう

だが、現代は却ってそのための好機であると逆にポジティブにとらえることもできるのではないか。

医療の使命はいうまでもなく病気を癒し健康を回復させることである。その場合病気の原因を究明し適切な治療手段を講じるのが大事な仕事になる。病気の発生機序の究明も必要である。しかしどうしてそういう病気になるのかという問には二つの意味がある。病気が実際におこる経過を事実として明らかにすることが一つ、それと連関する部分もあるが、もう一つはどのような生活どのような生き方をしていたから病気になったのかという観点である。一見同じように見えるかもしれないが両者は全く異なる。前者では病気の事実経過の解明に主眼がおかれ、そこから治療方法が案出されるが、後者には前者にない視点が含まれている。つまり病気の対立概念としての健康を元にした病気の予防という点である。医療の職務がすでに発生した病気の治療だけでなく、病気にならないようにする（病気の<sup>2)</sup>予防）ということを含むものであることはいうまでもない。勿論病気になってしまった者を治療して健康に復帰させるのも大事な仕事だが、なってしまってから治療するより、ならないように努力する方が大事なのではないか。何事でもすでに起ってしまったら、何らかの処置をせざるをえないが、起こることを未然に防ぐことができるなら、処理に費す労力を省くことができるというメリットがあるからである。（そうすると医療の仕事が減るといいうわゆるデメリットが生じるわけだが。）そしてこれが医療の本来進むべき方向ではないかと思われる。その意味では病人の数が増え医療が常に肥大化の一途をたどるといふ現況は決して好ましいものではない。否、明らかに間違ったあり方である。不健康な人間を増やして、それがいいすぎなら、そういう人間の増加を防止する努力をおこたり、自分の仕事をふやすなど本来あるべき姿ではない。医療の一番大事な部分は予防医学<sup>3)</sup>にあると考える。その点をよく考えて医療が自らの職務を誠実に果たすなら、病人の数は減ってしかるべきではないか。そしてそういう社会がよりよい社会といえるのではないか。

最も基本的な点にもどって考えるなら、人間の体は長い歴史の時間を経るうちに、免疫をはじめとする、遺伝子の傷修復能力その他いろいろの機能をそな

えるにいたり、巧みに自己保存を可能にする能力を獲得してきた。そしてそれが大きな意味で「自然」の枠内の事柄であると思われる。従って「自然」のあり方にはずれたことをしないなら、健康維持はかなりの確率で可能なのではないかと考えられる。自然治癒力というものは決してあなどれない。医療がするのは自然治癒力のお手伝いにすぎないというのは古来からいわれてきたことだが、限りなく正しい命題だと思わざるをえない。医療上の処置は大部分が自然に逆らったものなどと考えの人がいるが、考え違いもはなはだしい。医療は「自然」にさからっては何一つできないことを知らねばならない。

人体のメカニズムはたしかに極めて精巧で複雑にできている。その研究には限りがないともいえる。しかしそのメカニズムがはっきりわからないと健康維持ができないわけではない。むしろそんなことは知らなくても健康はシンプルな原理で守れるとすべきではないか。別に深い学識がなくても、また金をかけなくても、健康を保つことは十分可能であろう。人体は「自然」に逆らったやり方さえしなければ、高価な薬を飲んだりしなくても十分健康維持が可能のようにできている。そこをよく考え生活に生かすなら現代の医療のかなりの部分が不要になるのではないかとすら思われる。といってもどうしても医療がなくてはならない部分は当然存在する。脳血管障害とか交通事故の対応等、当然不可欠な部分はあるが、それは医療全体からみるとそれほど大きな比率を占めるわけではないということである。原理的にいって健康というものは、むつかしい理屈を知らなくても、特に金をかけなくても十分保てるようになっていると考えられる。

これに対する障害は、この単純な事実をわきまえないような蒙昧な状態に人々をとどめおこうとする力である。医療の側がその抵抗勢力となっている現状は遺憾というしかない。検査値の上下に一喜一憂するような医療によって作られた半病人状態の患者をかかえこむことで儲けることに自足するのではなく、医療は病が生活形態から生じる部分が多いことを教えるべきだろう。生活習慣病をあげるまでもなく、医療は生活の仕方ですべて防止可能な病気が多いことを知らせ、適切な忠告を与えるとともに、間違った生活形態に警鐘をならすべき

だろう。こんなことをすると患者は減るかもしれないが、これが自己否定をその基本的特質とする医療の本来のあり方である<sup>4)</sup>と考える。

註

- 1) 安保徹『医療が病をつくる』(岩波書店)。同『病気になるない免疫生活のすすめ』(中経出版) 参照。
- 2) 新谷弘実『病気になるない生き方』『病気になるない生き方2 実践編』(サンマーク出版) 参照。
- 3) 歴史をふりかえてみても、急性の伝染病やエイズの予防といった特別の場合をのぞき、一般に予防医学にあまり力が注がれてこなかったということは、残念ながら厳然たる事実である。そこにも資本主義社会のあり方が大きく影をおとしていることがうかがえる。
- 4) 病気の大部分がストレスに起因すると想定されることからしても、医療だけを問題にしてすむ話ではない。この社会のあり方そのものを問題にする視点が必要である。それにはこの社会のシステムそのものを変えていく以外に解決の糸口は見出せない。今回はその点にまで立入って論じることはできなかった。それは別稿にゆずるしかない。  
本稿作成の過程で有益な教示をうけた著作の一部を以下に記し謝意を表しておく。  
里見清一『偽善の医療』(新潮新書)  
小山内博『生活習慣病に克つ新常識』—まずは朝食を抜く!—(新潮新書)  
渡辺 正『朝食抜き!ときどき断食!』(講談社+α 新書)  
湯浅景元『老いない体をつくる』(平凡社新書)  
浜 六郎『高血圧は薬で下げるな!』(角川書店)  
永田 宏『貧乏人は医者にかかるな!』—医師不足が招く医療崩壊—(集英社新書)  
川嶋 朗『心もからだも「冷え」が万病のもと』(集英社新書)  
貞友義典『リピーター医師』—なぜミスを繰り返すのか—(光文社新書)